第14期『よくわかる福岡の歴史』　　2012年4月14日
「私の邪馬台国」第1回　　アクロス福岡会議室

九州の国々と邪馬台国

九州歴史資料館長・海の道むなかた館長
西　谷　　正

Ⅰ. はじめに

魏志倭人伝に見える国々

Ⅱ. 国と国邑・邑落

（1）国とは

（2）国邑について

魏志倭人伝「倭人は、帯方郡の東南の大海の中におり、山がちな島の上にそれぞれの**国邑**を定めている」（以下、今鷹真・小南一郎訳『正史三国志』4，ちくま学芸文庫より）

魏志韓伝「彼らの間の統治機構は未発達で、**国々の邑**に主帥（統率者）はいるが、地方の**邑落**は無秩序に散在し、それらをうまくまとめてゆく者はいない」

（3）邑落について

魏志韓伝「（前出）地方の**邑落**は無秩序に散在し、それらをうまくまとめてゆく者はいない」

Ⅲ. 九州の国々

（1）対馬国から奴国まで

（2）不弥国と斯馬国

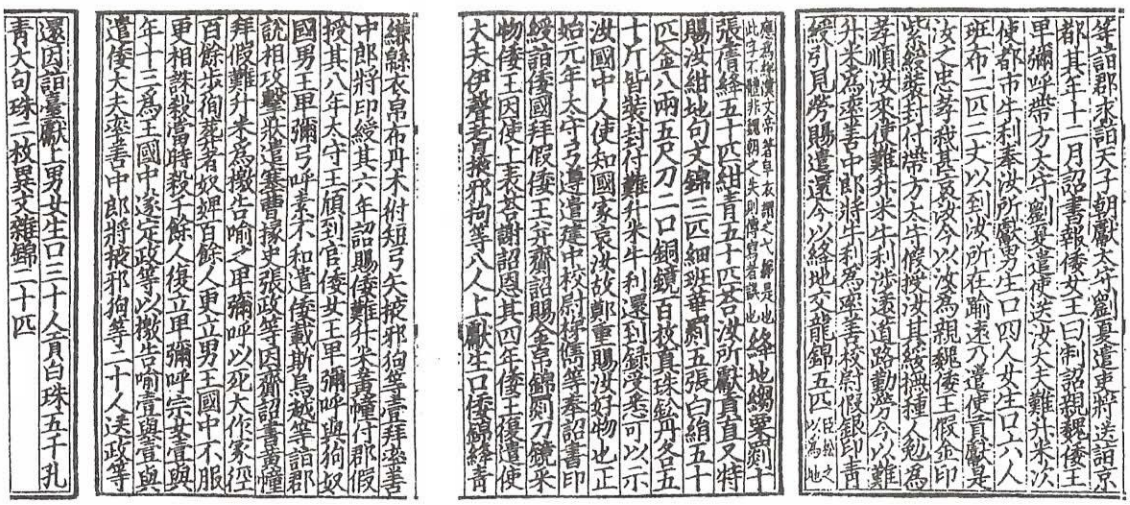
（3）吉野ヶ里遺跡の国

（4）侏儒国・裸国・黒歯国

Ⅳ. おわりに

（1）「企救」国の想定

（2）邪馬台国は何処に



また裸国・黒歯国はその東南にあり、舟行一年で到着できるという。

これらを含めて倭地の様子を尋ねると、海中の島々の上にはなればなれに住んでおり、あるいは離れ、あるいは連なりながら、それらを経めぐれば、五千余里にもなるだろう。

景初二年六月、倭の女王は大夫難升米を帯方郡に遣わし、魏の天子に朝献したいと請求した。帯方太守劉夏は、役人を遣わし、これを引率して洛陽に至らしめた。その年の十二月、魏の明帝は詔して、倭の女王に次のように述べた。「親魏倭王卑弥呼に命令を下す。帯方太守劉夏が使を遣わし、汝の大夫難升米と次使都市牛利を送り、汝の献じた男の生口四人、女の生口六人、斑布二匹二丈を奉り、わがもとに至った。汝の国ははるか遠いのに、使を遣わし朝貢したのは、汝のわれに対する忠孝の現われで、感心なことである。今、汝を親魏倭王に任じ、金印・紫綬を与えることにし、それを包装して帯方太守に託して、汝に授けることとした。汝は倭人を綏撫しわれに孝順をなせ。汝の使者難升米と牛利は、遠くからはるばる労して来朝したので、難升米を率善中郎将、牛利を率善校尉に任じ、ともに銀印・青綬を授けることとし、引見し賜物してこれを送り返す。今、絳地交龍錦五匹、絳地縐粟罽十張・蒨絳五十匹・紺青五十匹を汝の国信物にたいする回賜として与え、またとくに、汝に紺地句文錦三匹・細斑華罽五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各々五十斤を与えよう。

これらの品物は、みな包装して難升米・牛利に託するので、かれらが帰国したら、簿録（物品目録）と品物を照合して受取り、悉く汝の国の人々に示し、魏が汝を大切に思っていることを知らせなさい。よって鄭重に、汝に好物を与えるのである」と。

正始元年、帯方太守弓遵は、建中交尉梯儁らをつかわし、この詔書と印綬をもって倭国に行かせた。使者は、魏の少帝の使者という立場で、倭王に謁し、詔書をもたらし、賜物としての金帛・錦罽・刀・鏡・采物を贈った。倭王はこれに対し、使者に託して魏の皇帝に上表文をおくり、魏帝の詔と賜物に答礼の謝辞をのべた。

同四年、倭王はふたたび大夫伊声耆・掖邪狗ら八人をつかわし、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹・木狗・短弓矢を献上した。掖邪狗らは、率善中郎将の印綬を授けられた。同六年、少帝は詔して、倭の使者の難升米に、黄色の軍旗をあたえることにし、帯方郡に託して、これを授けさせた。

同八年、帯方郡の太守王頎があらたに任官された。倭の女王卑弥呼はもともと狗奴国の男王卑弥弓呼と不和で、倭の載斯烏越らを帯方郡につかわし、互いに戦っている状況を報告した。そこで太守は塞曹掾史張政をつかわし、先の詔書と黄色の軍旗をもって行かせ、難升米に授けて檄文をつくって卑弥呼に教えさとした。

その後、卑弥呼が死んだ。大いに冢を作りその径は百余歩、殉葬された奴婢は百余人であった。倭では女王の死後男王を立てたが、国中が服従せず、互いに殺し合い、このとき千余人が殺されたという。そこでまた卑弥呼の宗女である年十三の壹与を立てて王とし、国中がようやく治まった。張政らは、檄文をもって、壹与を教えさとした。壹与は、倭の大夫率善中郎将の掖邪狗ら二十人をつかわし、張政らの帰国を送らせた。よってかれらは魏の朝廷にいたり、男女の生口三十人を献じ、白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雑錦二十匹を貢進した。

原文　岩波文庫『新訂　魏志倭人伝・後漢書倭伝　宋書倭国伝・隋書倭国伝　―中国正史日本伝(1)―』（岩波書店　一九五一）より転載。

現代語訳　平野邦雄『邪馬台国の原像』（学生社　一九八九）より転載

倭の地は暖かく、冬も夏も生野菜を食べる。人々ははだしで生活し、家屋をたてるが、父母兄弟はそれぞれに居所を異にしている。朱・丹を体に塗るのは、中国で白粉を用いるようなものだ。飲食には高杯を用い、手づかみで食べる。死ぬと棺に納めるが、槨は作らず、土を盛りあげて冢をつくる。死んだとき、さしあたって十余日は喪に服し、その間は肉を食べず、喪主は声をあげて泣き、他人はその周りで歌舞・飲酒する。埋葬すると、一家をあげて、水中でみそぎをし、中国で一周忌に練絹を着て沐浴するのとおなじようにする。

倭人が海を渡って中国に来るには、つねに一人は頭をくしけずらず、しらみも取らせず、衣服は汚れたままとし、肉を食べず、婦人を近づけず、あたかも喪に服している人のようにさせて、これを持衰と名づける。もし、航海が無事にゆけば、かれに生口・財物を与え、もし船内に病人が出たり、暴風雨に会ったりすれば、これを殺そうとする。つまり持衰が禁忌を怠ったからだというのである。

倭の地には、真珠・青玉を産する。山には丹が出る。樹木としては、柟（くす）・杼（とち）・豫樟（くすのき）・楺（ぼけ）・櫪（くぬぎ）・投（すぎ）・櫪（かし）・烏号（やまぐわ）・楓香（かえで）があり、竹には、篠（ささ）・簳（やたけ）・桃支（かづらだけ）があり、また薑（しょうが）・橘（たちばな）・椒（さんしょう）・蘘荷（みょうが）もあるが、滋味ある食物として利用することは知らない。また獼猴（おおざる）・黒雉（きじ）もいる。

その通俗の行事や旅行にさいして、何かしようとすれば、骨を灼いて吉凶を占い、まず占うところを告げ、その解釈は中国の亀卜の法のように、火で焼けたひびわれをみて兆を占うのである。

その集会や居住の坐位には、父子男女の区別はなく、人々は性来酒が好きである。支配身分の人に尊敬を示す作法は、ただ拍手をして、中国の跪拝の礼にあてているようだ。

人の寿命は、あるいは百年、あるいは八～九十年で、その習俗は支配身分の者はみな四、五人の妻をもち、一般の村民でも二、三人の妻をもっている。婦人は淫らでなく、嫉妬もしないし、盗みもなく、争いごとも少ない。法を犯せば、軽いものは妻子を没官され、重いものは家族と一族が殺される。身分の上下の秩序はよく守られ、十分に臣服している。租税、賦役を収め、そのための建物（倉）がたてられ、国々には物資を交易する市があり、大倭に命じて、これを監督させている。

女王国より北には、とくに一大率をおいて諸国を検察させている。諸国はこれを畏れ憚っている。一大率はつねに伊都国におかれるが、これは中国の州の刺史のようだ。女王が使を遣わして、洛陽や帯方郡・諸韓国にいたり、また逆に、帯方郡からの使が倭に来たばあい、何れも伊都国の港頭で臨検し、文書や賜物を調べ、女王のもとに届けるものが、これと違わないようにした。

身分の低い一般の村民が、支配身分のものと道で出会うと、あとずさりして路傍の草むらに入り、これに辞を伝え、また事を説明するには、蹲まったり、跪いたりして、両手を地につけ、尊敬の意をあらわす。そのときの受け答えの声を噫というが、中国でいえば承諾の意味とおなじことだ。

その国は、もとは男子を王としたが、七～八十年ほど前、倭国が乱れ、何年も互いに攻め合ったので、諸国は共に一女子を立てて王とした。これを卑弥呼という。彼女は、神がかりとなり、おそるべき霊力を現わした。すでに年をとってからも、夫をもたず、弟がいて、政治を補佐した。王となってから、彼女を見たものは少なく、婢千人をその身辺に侍らせ、ただ一人の男子が飲食を給し、女王のことばを伝えるのに居処に出入りした。宮殿・物見楼・城柵などは厳重に設けられ、つねに兵器をもった人々がこれを守衛していた。

女王国の東、海を渡ること千余里で、また国々があり、これらもすべて倭種の国である。また侏儒国はその南にあり、人々の身長は三、四尺で、女王国を四千余里離れている。

三国志　魏書　東夷伝
倭人条【原文】

倭人傳

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚鰒水無深淺皆沈没取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐東南至奴國百里官曰兕馬觚副曰卑奴母離有二萬餘戶東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戶南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絶不可得詳次有斯馬國次有巳百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有烏奴國次有奴國此女王境界所盡其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里男子無大小皆黥面文身自古以來其使詣中國皆自稱大夫夏后少康之子封於會稽斷髮文身以避蛟龍之害今倭水人好沈没捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後稍以爲飾諸國文身各異或左或右或大或小尊卑有差計其道里

倭人は、帯方郡の東南の大海の中にあり、山や島によって国や村をなしている。もと百余国に分れていて、漢の時代に朝見してくるものがあり、現在では、魏またはその出先の帯方郡と外交や通行をしているのは三十国である。

帯方郡より倭に行くには、朝鮮半島の西海岸に沿って水行し、韓の国々を経て、あるいは南へ、あるいは東へと進み、倭の北岸にある狗邪韓国に到着する。これまでが七千余里である。

そこから、はじめて一海を渡ること千余里で、対馬国に到着する。その国の大官を卑狗、次官を卑奴母離という。居るところは絶島で、広さ四百余里平方ばかり、その土地は、山は険しく、深林が多く、道路は獣のふみわけ道のようである。千余戸があり、良田はなく、住民は海産物を食べて自活し、船にのり南や北と交易して暮らしている。

それからまた南に一海を渡ること千余里で一支国に到着する。この海は瀚海と名づけられる。この国の大官もまた卑狗、次官は卑奴母離という。広さ三百里平方ばかり、竹木・叢林が多く、三千ばかりの家がある。ここはやや田地があるが、水田を耕しても食料には足らず、やはり南や北と交易して暮している。

また一海を渡ること千余里で、末盧国に到着する。四千余戸があり、山裾や海浜にそうて住んでいる。草木が繁り、道を行くのに前の人は見えない位である。人々は魚や鰒を捕えるのが得意で、海中に深浅となく潜り、これらを取って業としている。

そこから東南に陸行すること五百里で、伊都国に到着する。長官を爾支、次官を泄謨觚・柄渠觚という。千余戸がある。代々王がいたが、かれらは皆、女王国に服属しており、帯方郡からの使者が倭と往来するとき、つねに駐るところである。

これから先は、東南、奴国に至るのに百里。長官を兕馬觚、次官を卑奴母離という。二万余戸がある。

おなじく東、不弥国に至るのに百里。長官を多模、次官を卑奴母離という。千余家がある。

また南、投馬国に至るのに水行二十日。長官を弥弥、次官を弥弥那利という。五万余戸ばかりがある。

また南、邪馬台国に至るのに水行十日・陸行一月。ここが女王の都するところで、長官を伊支馬、次官以下を弥馬升・弥馬獲支・奴佳鞮という。七万余戸ばかりがある。

このように、女王国より北の諸国は、その戸数と道里をほぼ記載することができるが、その他の周辺の国は、遠くへだたり詳しく知りえない。そこで、それらを列挙すると、斯馬国・巳百支国・伊邪国・都支国・弥奴国・好古都国・不呼国・姐奴国・対蘇国・蘇奴国・呼邑国・華奴蘇奴国・鬼国・為吾国・鬼奴国・邪馬国・躬臣国・巴利国・支惟国・烏奴国・奴国で、ここまでで女王国の境界はつきる。

そしてその南にあるのが狗奴国で、男子を王とし、長官に狗古智卑狗がある。この国は女王国に服属していない。

帯方郡より女王国までを総計すると一万二千余里となる。

倭では、男子は成人も子供もみな顔や体に入墨をしている。昔から倭の使が中国に来るとき、みな大夫と称する。夏王朝の六代の王少康の子が、会稽郡に封ぜられたとき、断髪して入墨し、海中にひそむ蛟龍（みずち）の害を避けたという。今、倭の水人は海中に潜って魚や蛤を捕え、体に入墨して大魚や水鳥から身を守ってきたが、後にはやや飾りとなった。倭の諸国の体の入墨は、国々によって左右や大小などにちがいがあり、身分の尊卑によっても異なる。

帯方郡からの道里を計算すると、倭は会稽郡や東冶縣の東にあることになろう。

倭の風俗は折目正しくきちんとしており、男子はみな冠をかぶらず、木綿の布で頭をまき、衣は幅広い布をただ結び束ねるだけで、縫うことはない。婦人はお下げや髷を結ったりして、衣は単衣のようにし、真中に穴をあけて頭を通して着るだけである。人々は稲・苧麻（からむし）をうえ、桑・蚕を育てて紡績し、上質の布・縑・真綿などを産出する。その地に、牛・馬・虎・豹・羊・鵲はいない。兵器には、矛・楯・木弓を用い、木弓は、下を短かく、上を長くし、竹の矢には、鉄鏃や骨鏃を用いる。要するに、これらの産物や風俗などをみると、儋耳・朱崖と同じである。

今月の言葉

「魏志倭人伝」に見える国邑

Koku-yu (*The regional centers*) in the Yayoi period of Japan recorded in *Gishi-wajin-den*

西谷　正（九州歴史資料館長）

Tadashi Nishitani ● Director, Kyushu Historical Museum

『正史 三国志』（今鷹真・小南一郎訳，ちくま学芸文庫）によると，「魏志韓伝」に見える国邑に関して，国の邑と読んでいる。また，「国々の邑に主帥（統率者）はいるが，地方の邑落は無秩序に散在し，それらをうまくまとめてゆく者はいない」とも読まれている。したがって，「魏志倭人伝」の冒頭部分に見える「倭人は，…山がちな島の上にそれぞれの国邑を定めている」とある国邑についても，同じコンテキスト（文脈）から国の邑と解釈できよう。ここで，韓伝に見える国邑と邑落を，考古学上の遺跡で検証すると，それぞれ大規模で，しばしば環濠で囲まれた拠点集落と，その周辺に散在する，いわば衛星集落の遺跡に相当するのであろう。ちなみに，弥生時代後期後半に当たる倭人伝に記される国は，古墳時代あるいはヤマト王権時代の縣や，さらに時代は降って律令時代の評・郡を経て，現代の郡に継承されている。同じように，邑落は律令時代の里・郷や，近現代の村・大字にほぼ対応する。たとえば，奴国の場合で見ると，国邑は福岡市の比恵・那珂遺跡群もしくは春日市の須玖岡本遺跡群が想定できる。そして，奴国を構成する邑落は，福岡県筑紫郡那珂川町の安徳台遺跡をはじめとして，福岡平野の各地に散在する中・小の遺跡群が想定される。

ところで，倭人伝の冒頭部分にはまた，「もともと百余国があって，漢の時代に中国へ朝見に来たものがあった。現在，使者や通訳の往来のある国が三十国ある」とも記載する。ここで，百余国のうちのいくつの国が外交関係を持ったかについては言及していない。ところが，三国時代に入って，魏との間で外交関係を持った国が三十国あったとは記すものの，その当時の倭に国がいくつあったかについては何も記していない。この点に関して，前漢時代のころ倭に百余国あった国々が，魏時代になって三十国に統合化が進んだとする見解が少なからず見られる。しかし，いま見たとおり，その三十国はあくまでも魏との間で外交関係を持った倭の国々であった。そこで問題になるのが，その当時の倭における国々の数である。

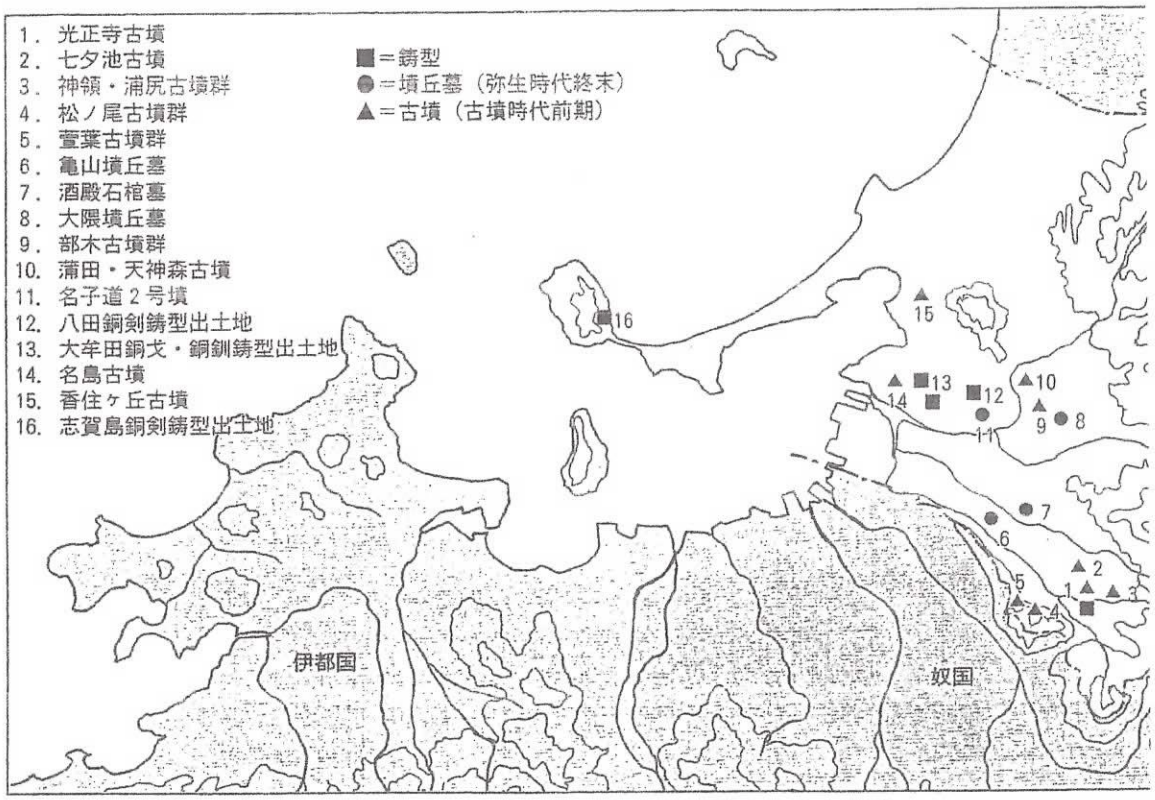
私はこれまで全国各地で，郡という地域単位を対象に，弥生時代における農業共同体とその首長墓（区画墓）から，国と王墓（墳丘墓）を経て，古墳時代における縣と縣主墓（主として前方後円墳）の形成に至る歴史過程を検証してきた。わずかにその一例を，博多湾に面した室見川流域平野で考えてみよう。ここでは，福岡市早良区の吉武高木遺跡3号木棺墓が，弥生時代中期前半ごろ形成された農業共同体の首長墓と考えられる。その後，中期後半になると，樋渡遺跡の墳丘墓が築かれた。ここの甕棺墓からは，前漢鏡と素環頭大刀などが出土したが，これらは，前漢時代の楽浪郡からもたらされたものと推測する。そして，その背景に，ここの地域集団が楽浪郡を通じて前漢帝国と外交関係を結んだことを契機に，農業共同体が国に，また，首長が王に成長，発展した政治的歴史過程を想定したい。そのように，倭人伝に見える国邑の問題を考えるとき，日本列島各地における律令時代の郡規模の地域単位の考古学的研究が重要なのである。

3世紀の東アジア諸国と北部九州の国々

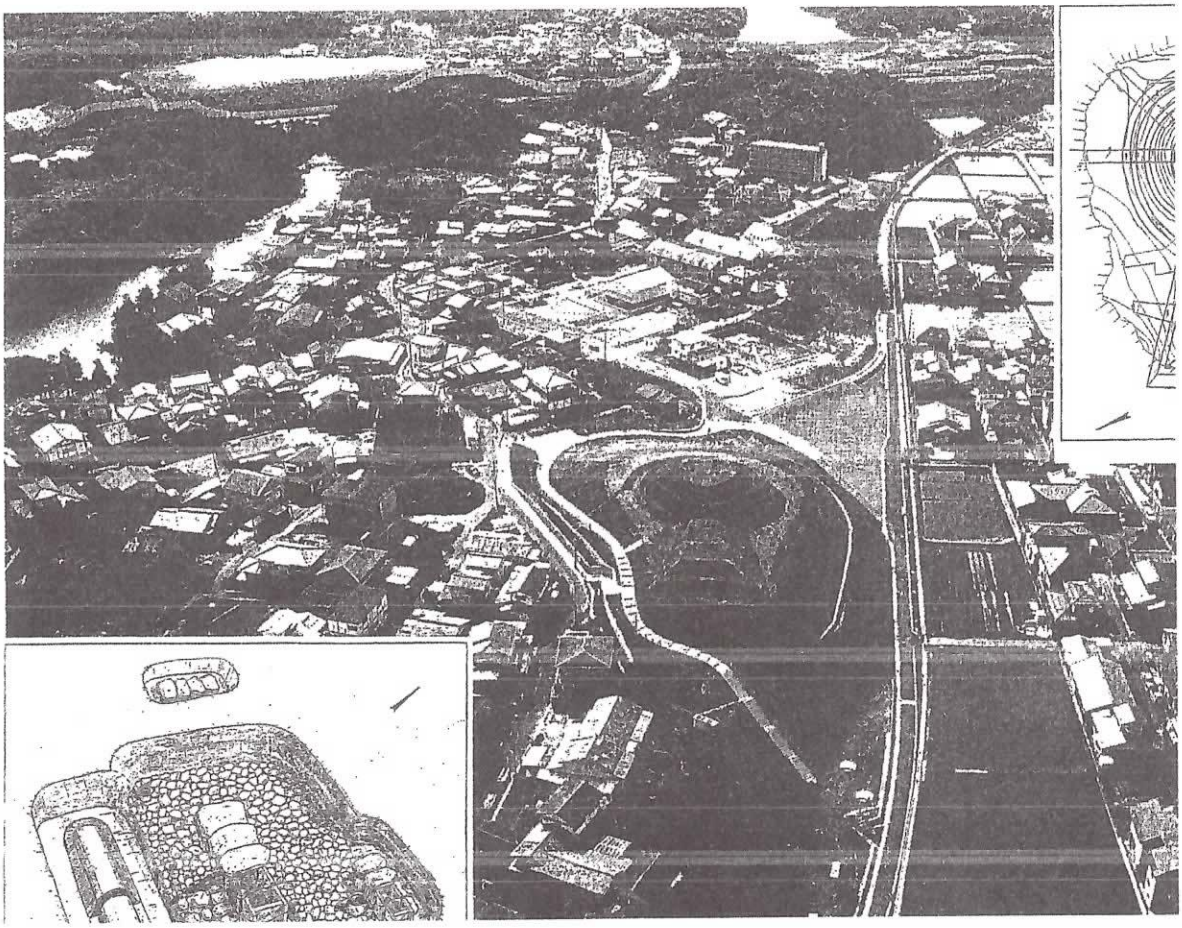
楽浪郡と帯方郡　楽浪郡は前漢の武帝が紀元前108年に朝鮮半島に設置した四郡のひとつ。中国本土から多くの官吏、商人らが移住し、その文化は周辺諸地域の人々に大きな影響を与えた。

帯方郡は三世紀初頭に遼東の公孫氏の台頭によって楽浪郡の南部に設置された郡。前漢の時代には倭人が楽浪郡に朝貢し、魏の時代には邪馬台国の女王卑弥呼が朝貢したとされている。

第19回国民文化祭前原市実行委員会ほか，2004『シンポジウム　邪馬台国の時代「伊都国」』



糟屋郡の位置と主要遺跡



『翰苑』

邪届伊都傍連斯馬 廣志曰 倭国東

南陸行五百里到伊都国又南至邪馬嘉国百女国以北其

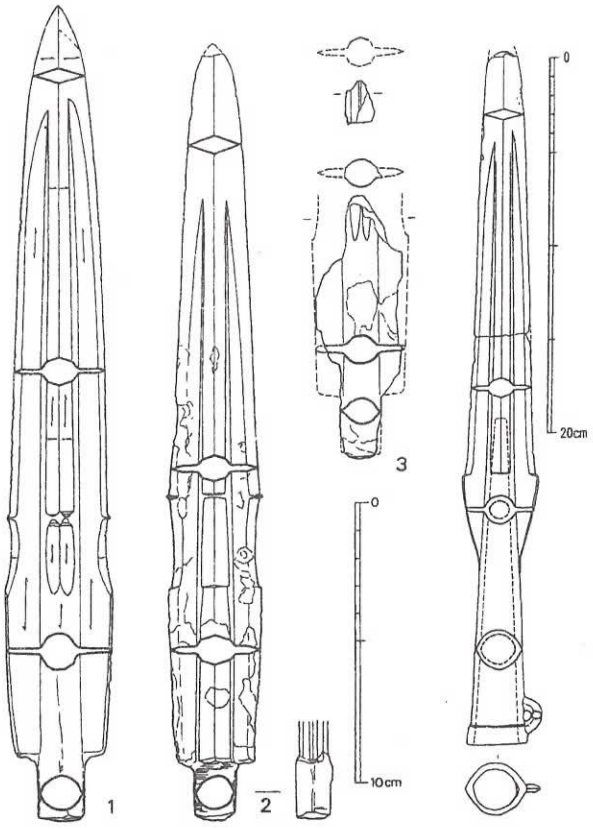
戸数道里可得略載次斯馬国次巴百支国次伊邪国安

倭西南海行一日有伊邪分国無布帛以草為衣蓋伊邪

也国

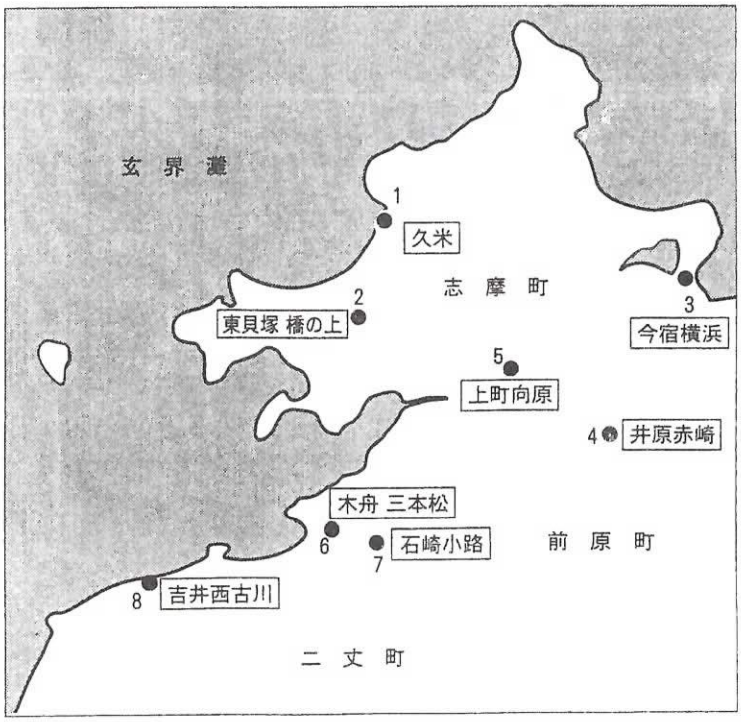
邪は、伊都に届り、傍、斯馬に連なる。

広志に曰く、倭国、東南に陸行すること五百里にして、伊都国に到る。又南して邪馬臺国に至る。女王国より以北は、其の戸数道里、略載することを得べし。次に斯馬国。次に巴百支国。次に伊邪国。案ずるに、倭の西南に海行すること一日に、伊邪分国有り。布帛無く、草を以て衣と為す。蓋し伊邪国なり。



赤碕・吉井・向原出土の銅剣実測図　　吉井出土銅矛実測図

柳田康雄『九州弥生文化の研究』より



No.	出土地名	遺構	副葬品
1	久米	甕棺墓	細形銅剣1 細形銅戈1 管玉6
2	東貝塚橋の上	甕棺墓	磨製石剣1
3	今町横浜	土壙墓	銅剣1
4	井原赤崎	?	細形銅剣1
5	上町向原	?	細形銅剣1
6	木舟三本松	甕棺墓	磨製石剣1 ヒスイ勾玉1 管玉18　他
7	石崎小路	甕棺墓	管玉120以上 銅釧1 ヒスイ勾玉1
8	吉井西古川	甕棺墓?	細形銅剣1 細形銅矛1

（※出土伝承地・遺物が現存しないものを除く。）

糸島地域の弥生中期前半期における副葬墓の分布

倭人伝「斯馬国」拠点か

弥生中期の大型建物跡

福岡・志摩町　大規模集落 中央に3棟

福岡県志摩町教委は21日、同町小金丸の一の町遺跡で、弥生時代中期後半（約2千年前）の同時代最大級の大型建物3棟を含む大規模な集落跡が見つかった、と発表した。玄界灘に面する大陸との対外交渉の最前線にあたり、「魏志倭人伝」などに記述がある「斯馬国」の拠点との見方が出ている。

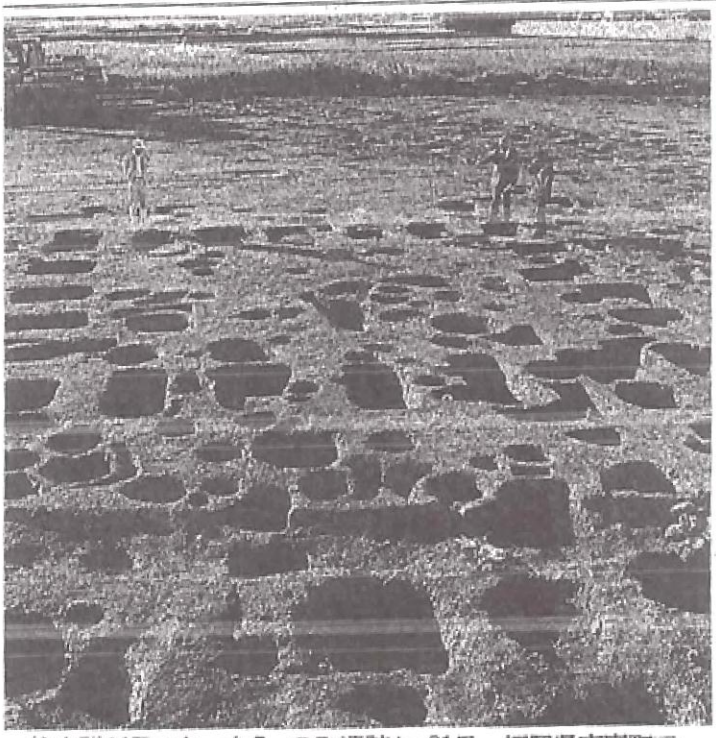
遺跡は当時の海岸線近くに位置し、弥生中期前半から後期前半にわたる掘っ立て柱建物跡十数棟や直線に並ぶ柵列、貯蔵穴などが見つかった。集落中央では約50平方㍍のほぼ正方形の大型建物2棟と、長方形の1棟がまとまって出土。このうち1棟は、合計22本の柱穴がいずれも1㍍以上でその中に30㌢程度の柱の痕跡も残っていた。中央部には床を支える棟持柱の穴もあった。同時に見つかった土器などから、3棟とも中期後半とみられる。

同町教委によると、大型建物が密集して発見されるのは全国的に珍しく、「祭りあるいは外交施設など特殊な役割を持った建物ではないか」とみている。

大型建物付近からは中国製の「方格規矩四神鏡」の破片や石でできた剣の柄飾りのほか、ガラスや碧玉製の管玉が見つかり、有力な首長の存在を示すという。

魏志倭人伝では邪馬台国の地理的な位置の説明の後、「次に斯馬国あり」と記されている。

周辺には豪華な副葬品で有名な「伊都国王墓」の三雲南小路遺跡がある。



柱穴群が見つかった「一の町遺跡」＝21日、福岡県志摩町で

王墓の発見に期待

西谷正・九州大教授の話　建物の規模などから、魏志倭人伝や「鞠苑（かんえん）」などの中国の歴史書に記述のある「斯馬国」の中心的な集落だった可能性がある。伊都国との関係の解明も含め、今後の調査で王墓などの発見を期待したい。

「伊都国」との関係が焦点に

《解説》一の町遺跡のある糸島半島は弥生時代、大陸文化の受け入れ口の役割を担った。志摩町教委によると当時、同遺跡周辺にまで海が迫っていたといい、大型建物群は外交施設との見方が浮上している。

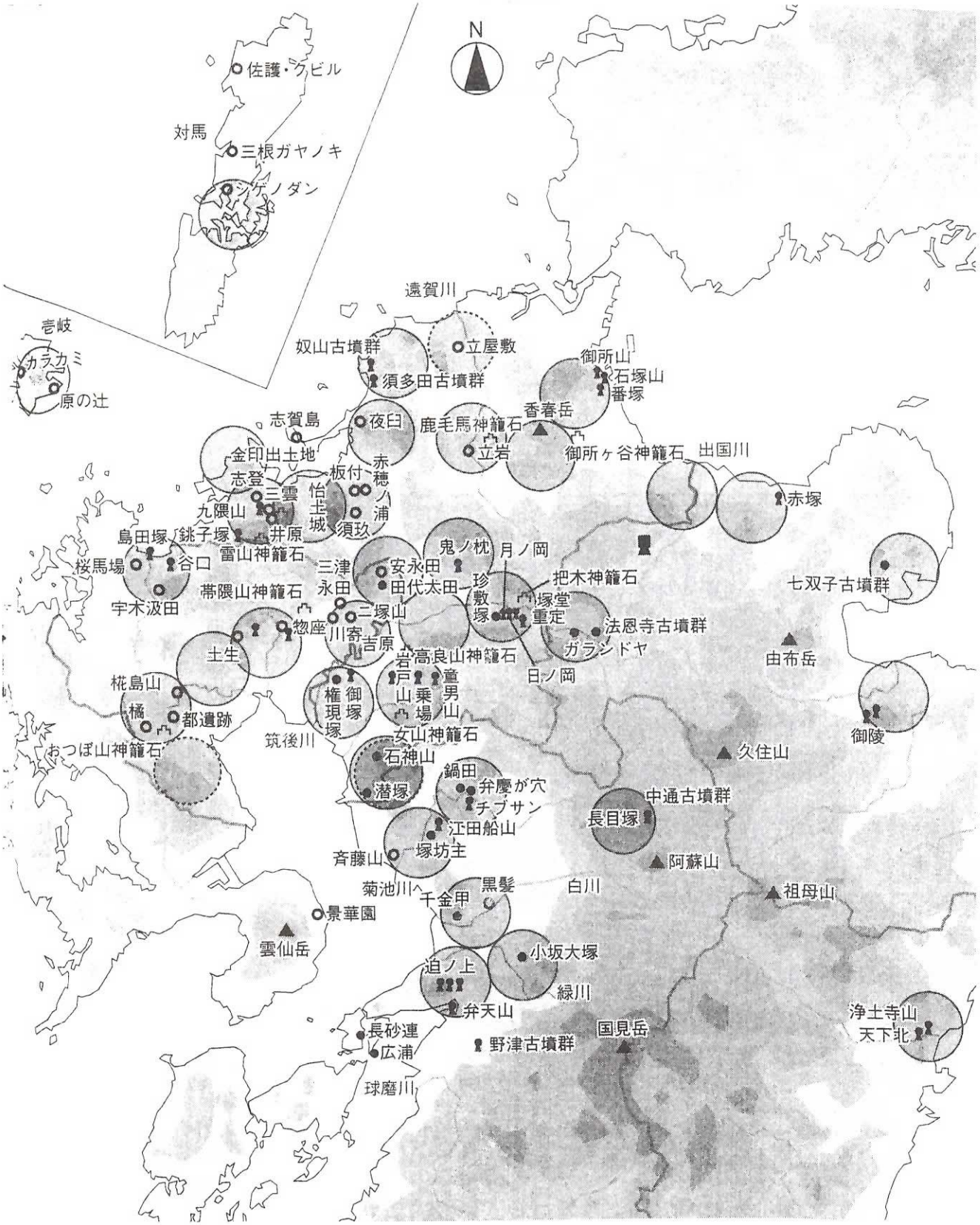
従来、糸島半島は強大な勢力を誇った伊都国（福岡県前原市周辺）の一部としてとらえられてきたが、同遺跡の出現は独立する勢力の存在の想定を可能にした。その候補が「斯馬（しま）国」だ。

「鞠苑（かんえん）」には「伊都に届（いた）り、傍（かたわら）、斯馬に連なる」とあり、読み方によっては伊都国と境を接することをにおわせる。中国の歴史書記載の弥生のクニグニで場所が確定しているのはわずかなだけに、斯馬国とすれば倭国の実態を知るうえで大きな手がかりを提供することになりそうだ。

問題は伊都国との関係。弥生中期後半以降、豪華な副葬品を持つ王墓が現れ、邪馬台国台頭まで倭国の代表として奴国と覇権を争った。「後漢書倭伝」にある西暦107年の中国への朝貢の主体は、伊都国ともいう。

今回見つかった拠点集落が、伊都国の〝出先機関〟なのか、独立勢力だったのか。その性格付けが今後の課題となろう。

（学芸部・中村俊介）
（社会部・山本義裕）



邪馬台国時代の北部九州の「クニグニ」

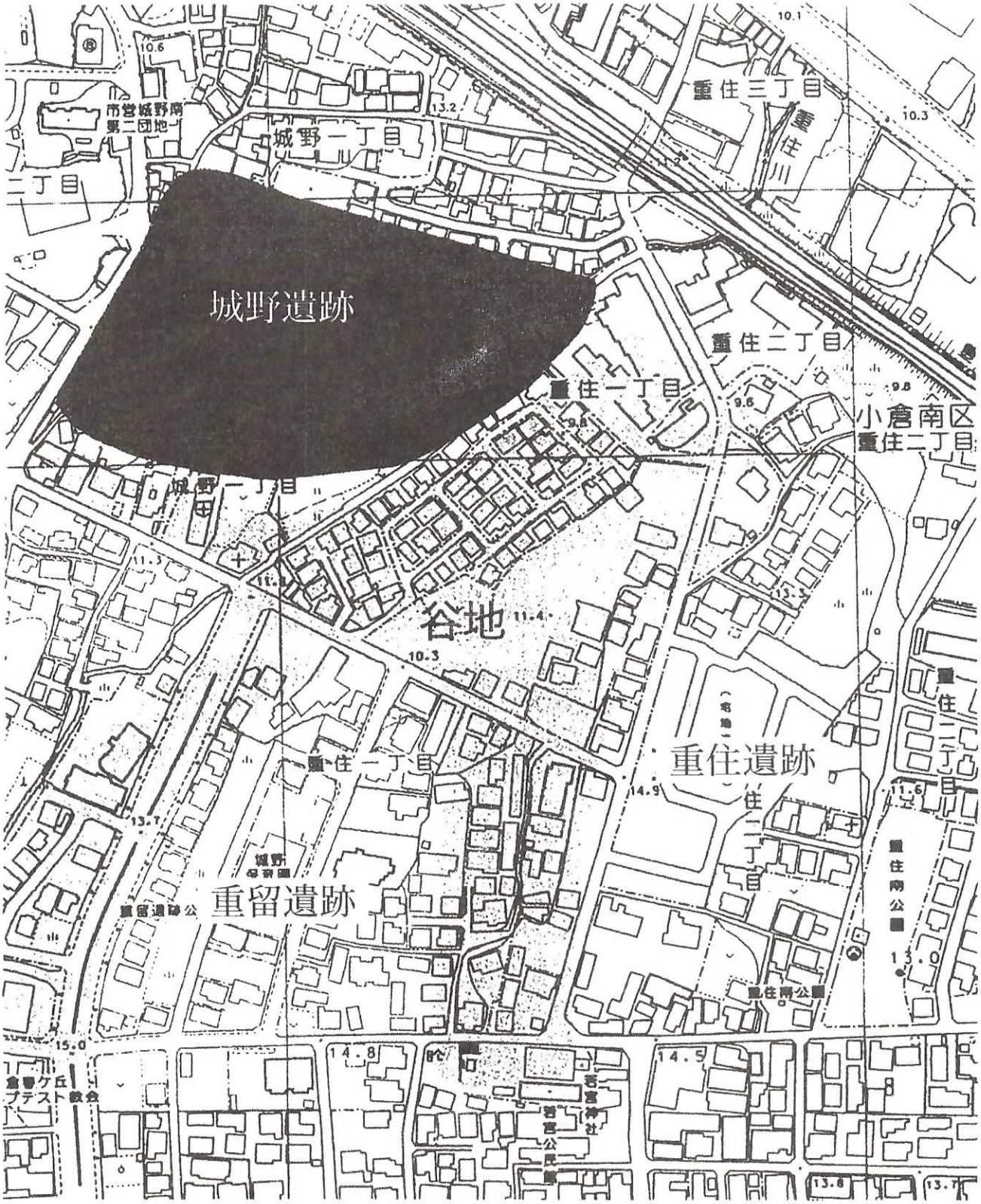
石野博信編，2012『邪馬台国とは何か　吉野ヶ里遺跡と纒向遺跡』新泉社

北九州市域の環濠集落・墳墓分布図

3. 重留遺跡　4. 寺町遺跡　7. 伊崎遺跡　8. 城野遺跡　10. 金山遺跡
14. 長野尾登遺跡　16. 小倉城二ノ丸家老屋敷跡　17. 郷屋遺跡

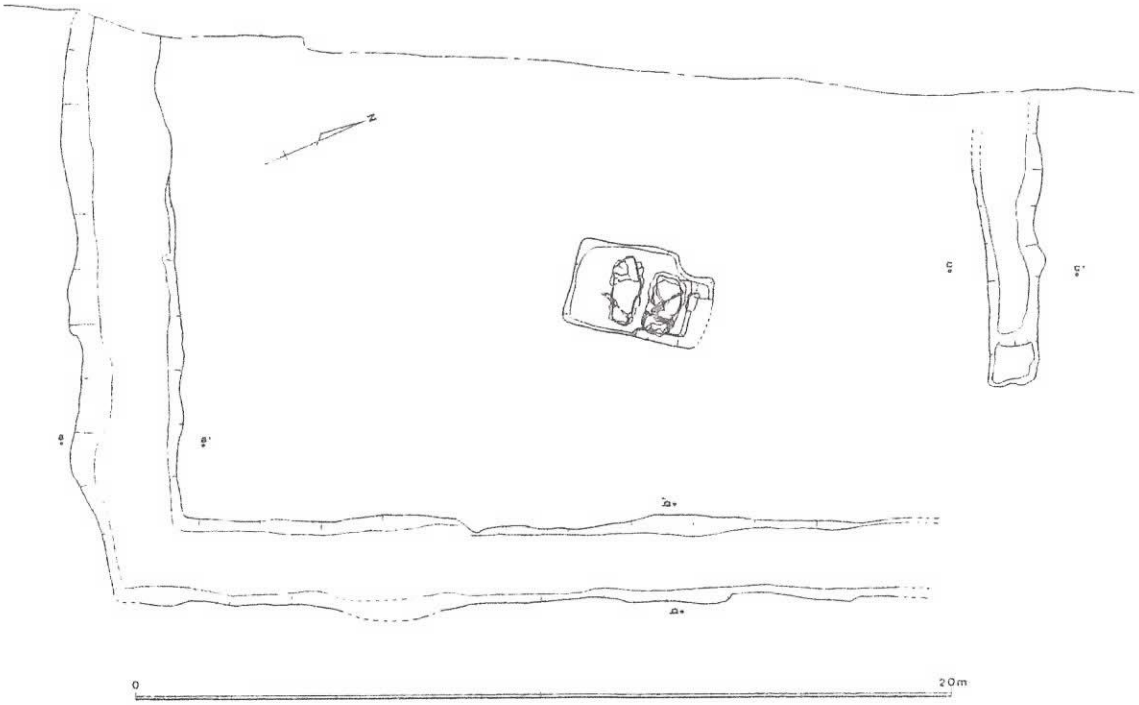
（『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第433集より）

西谷　正，2012「「金城」国の想定」『研究紀要』第26号
財団法人北九州市芸術文化振興財団　埋蔵文化財調査室



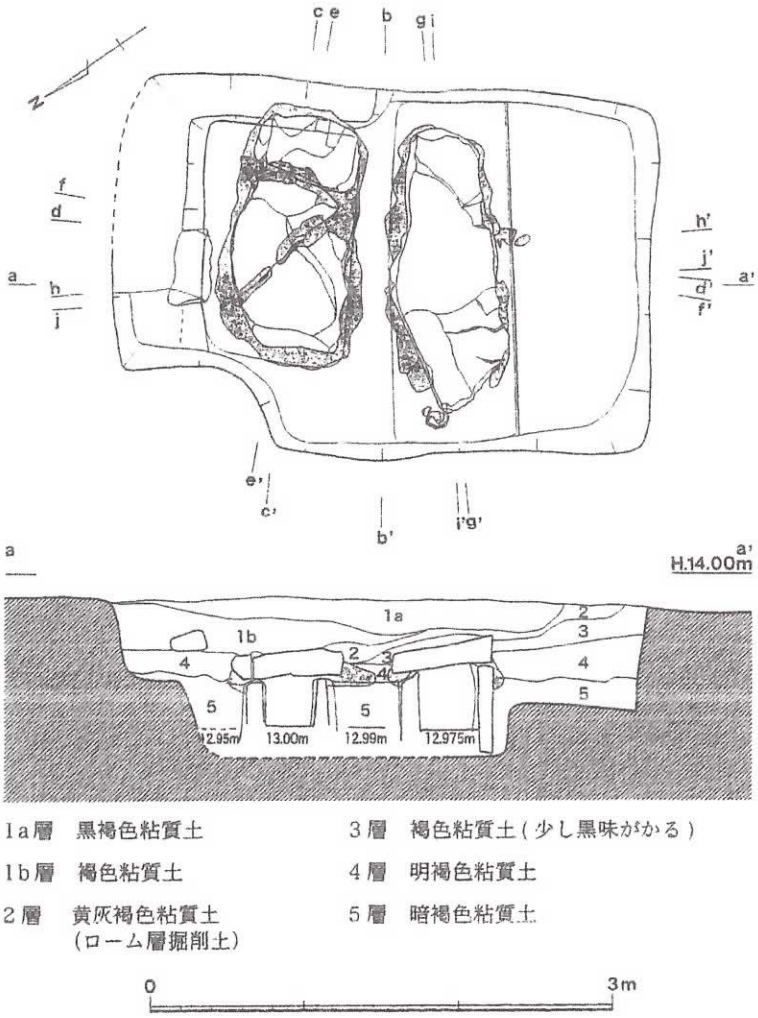
城野遺跡・重留遺跡・重住遺跡の位置

（城野遺跡発掘調査事務所，2010『発掘ニュース』75号より）



城野遺跡方形周溝墓実測図

(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 447 集より)



1a層　黒褐色粘質土

1b層　褐色粘質土

2層　黄灰褐色粘質土
(ローム層掘削土)

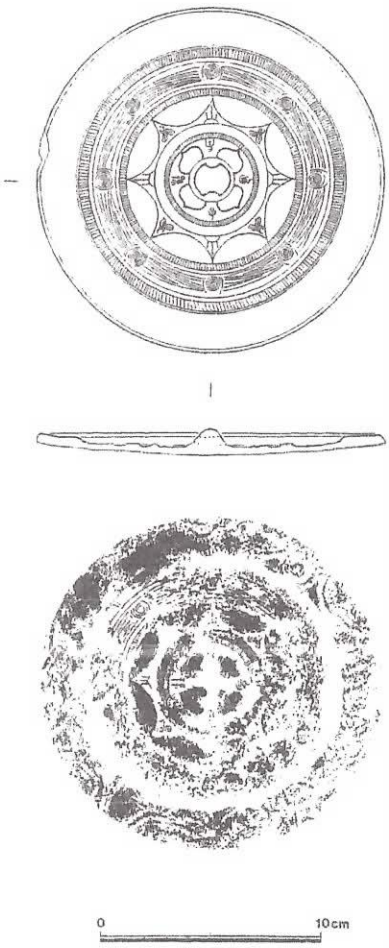
3層　褐色粘質土(少し黒味がかる)

4層　明褐色粘質土

5層　暗褐色粘質土

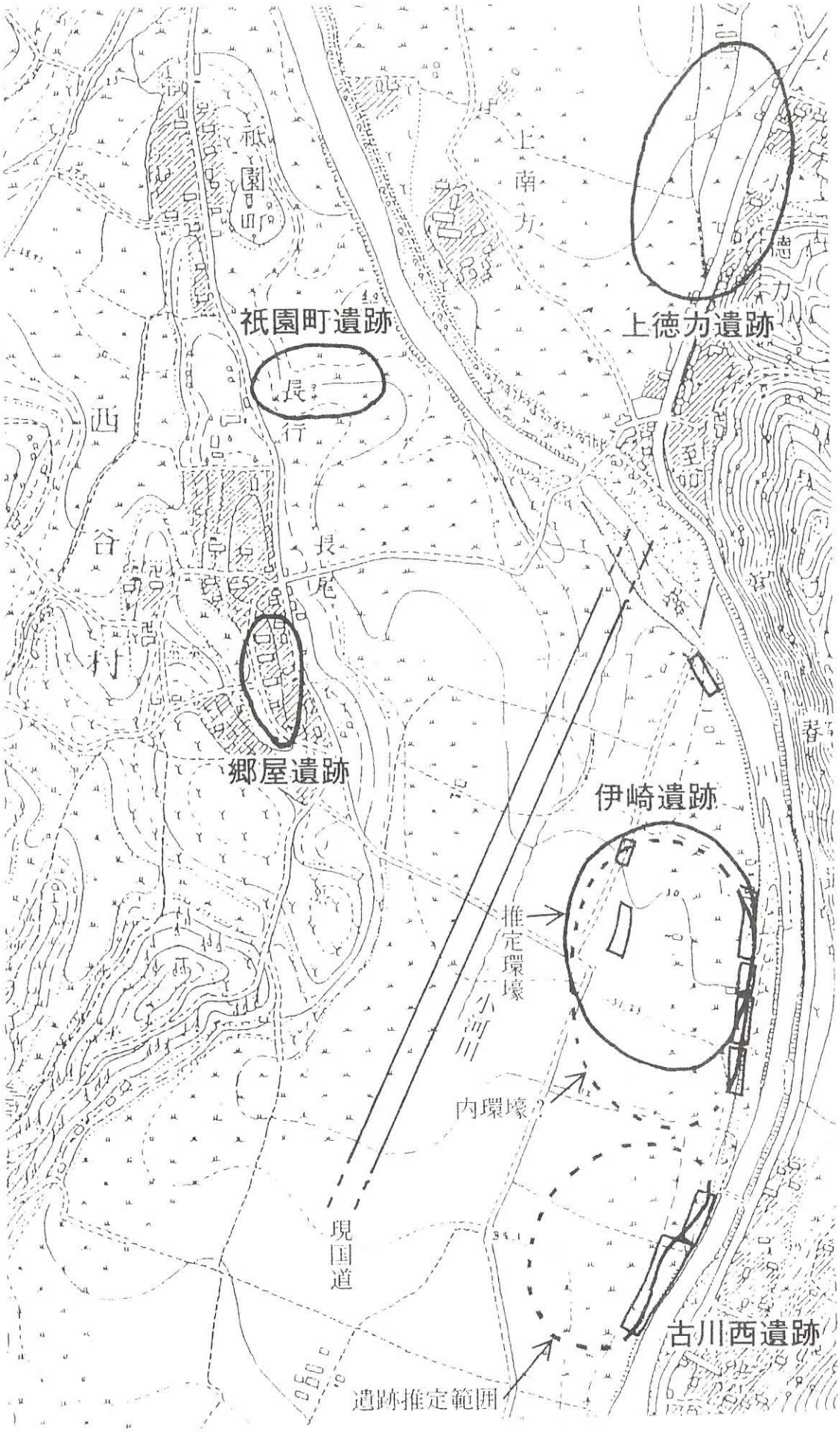
城野遺跡 1 号墓実測図

(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 447 集より)



小倉城下屋敷跡出土長宜子孫内行花文鏡実測図・拓影

(『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第 222 集より)



伊崎遺跡環濠推定範囲と周辺遺跡